せたかむい

発行・古平町史編纂室
文化会館 ☎42-2590
第195号・平成17・12・1

年表で読む古平の歴史

《100》

果樹園芸　リンゴ③

◇リンゴの輸出　～続き

国内にも広く送られ、また輸出も盛んでしたが相手国のロシヤの国内事情から、大正の中頃には全く途切れてしまいました。

後志管内ではリンゴ栽培が盛んであったことから、管内の物産共進会でもリンゴの出品が多く、古平町からも競い合って出品されていましたが、入賞などの記録として残っているのはわずかです。

賞状

古平郡古平町
田岸岸太郎

苹果　緋の衣
四等賞

後志物産共進会審査ノ成績ニ依リ之ヲ授与ス

大正二年十月二十六日

北海道庁長官 中村純九郎

この年八月九日の梅野清太郎日記に「八幡丸夜にいたり、林檎一万斤（約六トン）積載す」、一八日にも「八幡丸本日出帆、林檎積載」とあり、これは小樽港へ送られていました。

◇リンゴの病虫害

古平町のリンゴ栽培を一番悩ましていたのは病気と害虫でした。これは農業にとっての宿命ですがことに園芸作物は被害が大きく、病虫害に対する防除法も進んでいなかったこともあって、これが古平町のリンゴ栽培を衰退させる大きな原因ともなりました。

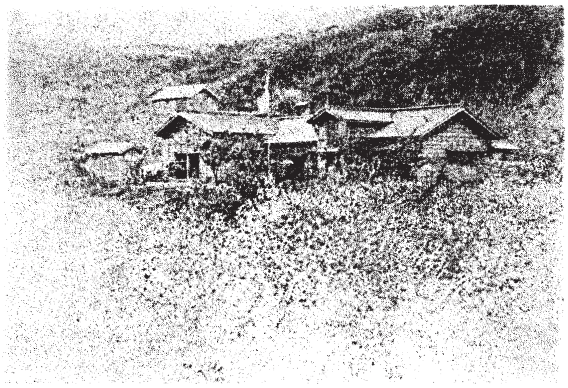
大正八年頃からはスムシ（葉を食べる毛虫で、孵化したときはだんご状になっている）が目立って発生するようになり、防除の知識もとぼしかったことから、結実を見ないうちにほぼ全滅するという事態も起きてしまいました。このスムシには砒酸鉛（ひさんえん）という農薬が有効でしたが、それを使う時期が遅れたために被害が大きくなったということもありました。さらにシンクイムシ、ゾウハナムシなどの害虫も発生して、小さい実になると袋かけをして防除するようになりました。

大正九年、古平町は北海道庁令によるリンゴの病虫害予防地となったことから、全町を一二区に分け、予防駆除委員を任命して、町農会と協力し駆除に当らせました。

農会には特定の薬剤を無償で交付した外、防除薬剤代として二五〇円を補助しています。

大正八年、北海道果樹栽培協議会では、地域の優良品種を選定してその指導をすることにし、古平町では次ぎの品種が選定されその実地指導を受けました。

早生＝紅魁（五十八号）・黄魁
中生＝旭・紅絞（十二号）
　　　祝（十四号）
晩生＝倭錦（阿部七号）・青龍（九号）・国光（四十九号）



←関口家のリンゴ園風景
現在のパークゴルフ場付近、このリンゴ園は古平河畔まで広がっていたという

当時の世相を見る

高野名幸作さんの日記から《106》

大正一三年 ～続く
七月九日～八月一二日

▼七月九日

今日は祭礼宵宮祭当日だ、町中は大国旗、チョウチンなどで飾られて美しく賑やかだ。リンゴの袋掛けも午前中やり午後は休んだ。私は一時頃∧八さんまで、大謀網用アバ縄の値段のことで行く。柳原曲馬団が来ていて、小学生は一五銭で見せるというので吉治が行く。父やトシは後で見に行くとのこと。夜、文治、吉治を連れて郷社へ参詣する、ずいぶん賑やかだ。入船町の㋑千場では柳原曲馬団の外、三軒も見世物小屋が建っていてどこも賑やかだ。猿芝居を見て一一時帰る。午後から妻、コノさん、四郎、ユキちゃんも参拝に行く。

▼七月一〇日

祭礼中で町は賑やかだ、八時に神社へ供進使が参向する。小学生など皆参拝に行く。浜町の山車も九時頃、賑やかで勇ましいハヤシで新地へ行く。家では赤飯の馳走あり、二時頃、文治、悦三を連れて、三人で㋑千場の曲馬団見物に行く、木戸銭は一等一円だが割引券で五〇銭で入る。ムシ暑い中ジュバン一枚で真っ赤になってやっている。五時終わる。あまりおもしろくはなかった。大蛇を見た後、見世物を見て歩く。氷水を飲み、「ヨに寄って休む。ゆで卵、イチゴ、赤飯を馳走になり、七時帰る。ナギのよいことタタミを敷いたようだ。祭りの行列が沢江から帰るのを迎え恵比須神社までお供をする。

▼七月一一日

起床七時、今日も朝から天気快晴、暑さ厳しくむされるようだ。祭礼で町中は賑やかだ。神輿は九時半にご出発、私も行列のお供をする。この日は暑さもまた格別だ。四時過ぎ港町厳島神社の前で帰る。祭礼の三日間は晴天で無事に終わった。不況という割りに、祭りは近年になく賑やかで盛大であった。今年の浜町の山車は宝鏡に大きな紅白のお餅をお供えした。丸山町、港町・入船町から子供山車が一つずつ、合計四つの山車が出た。

▼七月一二日

毎日の快晴続きだが今日の暑さはまた格別だ。日中の室内温度は八八度F(三一度C)、夕方になっても八五度Fだ。ダシ風も激しく吹きちょうど五月頃のような風だ。ひと雨あってほしいものだ。松方公の国葬があり学校、銀行など休む。農園からサクランボをもいで来る。

高太郎さんから、鮮魚商をやって見たいからと資金調達の依頼が来たが、この不況では申し込みに応じられないことを返事する。

▼七月一三日

今日も快晴、ひと雨ほしいが降りそうにもない。∧平兄さん今日演習に召集され、出発するというので浜まで見送りに行く。妻、子供達も皆農園行き、私は四郎の守役だ。悦三は暑さでシャツ一枚で農園へ行き、サクランボを食べ過ぎたのか腹具合が悪いと休んでいる。大したことがなければいいが。

▼七月一四日

起床七時、イカ漁があるので道具を買いに来る。イカも多いときは七〇〇～八〇〇もとるとのこと。そして珍しい程大きい。九時頃農園へ行きリンゴの摘果をする。今日は出面を一〇人ほども頼んだ。なかなか暑い。チョッキリ虫などがついている。この暑さでは虫も出るだろう。油断なくせいぜい早く袋掛けをせねばならぬ。暑さきびしい。

▼七月一五日

起床七時、今日も朝から焼けつくような暑さだ。袋掛けにはいいが作物はひと雨ほしい。過日、共立大謀へアバ縄の値段を通知しておいたら、取りあえず五〇〇丸ほど入用と宮本さんが来られる。せいぜい勉強して売りたいものだ。この日、九時に農園へ行き一三人で袋掛け。私は摘果をする、1号、7号などは大成りだ。この日の暑さは実にコゲつくようだ。首も腕も真っ赤になりビリビリする。夕方、サクランボをもいで帰る。悦三、一昨日から熱

が三八度からあるので、蓮実さんに来てみてもらう。あまり暑いので四郎を抱いて海岸を散歩する。月光が輝き、涼風が吹き心地よい。

▼七月一六日

今日もまた炎熱が甚だしくむされるようだ。熊さんは一四、五人の出面と共に袋掛けに一生懸命だ。虫もポツポツ見えるので袋掛けも大急ぎだ。一八日頃までには一段落するだろう。日中はあまり暑いので、子供等はタライに入っている。悦三と吉治は、一三日農園へ行って暑気当たりしたのか、昨夜三九度も熱を出して心配したが、今日は幸いにも機嫌よく、熱も下がって遊んでいる。この分なら大丈夫だろう。幸治からはがきが来る。緑町二丁目の工藤方に下宿を代えたとのこと。今日から試験、二二日までで終わり、のち休暇になる由、暑さ一日以来続く。

▼七月一七日

今日も炎天、七日以来八〇度Fの以上の炎熱が一〇日も続く。こんなに炎天が続くことも稀だ。学校でもあまり暑いので、この頃は午前中だけ授業して帰って来る。私は今日農園行き。今日で三日通った。袋掛け一四、五人でやっている。リンゴの虫も大分見えてきた。惜しいが三分くらいは虫にやられそうだ。明年からは、一五日頃までには袋掛けを終わるようにせねばならぬ。悦三、昨日あたりから容態がよく、機嫌よく遊んでいるので安心した。五時頃、妻と子供等四人が農園に来てサクランボをもぐ。

▼七月一八日

今日もまた快晴、炎天だ。農家は毎日の炎天で困るので、禅源寺で雨乞いしたとのことだ。私は八時頃農園へ行く、今日で四日行くが暑さで焼けつくようだ。一四人の出面でやっている。昼食はムシロを敷いて弁当を開き、冷たい水でご飯を食べるのも実においしい。人間はよく働くのが何よりの薬だ。この日で袋掛けも一段落、虫も見えたが、割りに早く終わりよかった。むし暑いので家では裸で汗を流している。夜、八時頃から天曇り雨が降り出した。この雨は甘露として喜ばれることだろう。

▼七月一九日

昨夜来の雨、一日中降り続く。畑の作物には実によい雨だ。明日から土用に入りいよいよ暑気激しくなる。大根まきもこれから始まる。この日三穂丸で、佐渡信濃屋からアバ縄一四二丸着、田の倉庫を借りて入れる。大謀関係のものばかりだ。雨が降ったがまだむし暑い。

▼七月二〇日

雨の後晴天になり、暑さがまたきびしくなった。熊さんと出面六人で、58号の袋掛けの見落としを掛けている。暑さが強くシャツ一枚だ。午後五時頃、畑の甚内さんの主人が亡くなったと聞き弔いに行く。帰り農園に寄りスイカ、ナスの草取り、肥料をやる。しばらくして六時頃帰る。

▼七月二一日

起床六時、曇天、時々雨が降る。畑作物もこれで十分だ。今日は雨で出面は休み、熊さんだけが行く。店は閑散期だ。妻は困で見切り品の売出しがあるというので買いに行く。のち新地町正、人などへ行く。幸治から手紙が来る、二一日、英語の試験があり終了式、二二日から暑中休暇なので帰宅するという、四ヶ月ぶりなので楽しみにしていることだろう。

▼七月二二日

起床六時、昨日からの雨はその後大雨となって降り続く。古平川が増水したというので、一時間だけ授業して沢江方面の生徒は帰る。目下、古平橋は普請中で仮橋のためだ。幸治が午後の船で帰って来るというので、子供等が迎えに出たが来なかった。大雨のためきっと延期したのだろう。悦三は来ないと言って怒っている。夜、甚内さんのところの通夜に行く。ずいぶん暑い。

▼七月二三日

昨夜来の雨、今朝は晴れた。富本慶助さんの葬式を送りに行く。ずいぶん暑い、一一時帰る。一一時半の外浜丸で幸治が帰って来た。四ヶ月ぶりでの帰宅、幸治も子供達も大喜びだ。土産物を取り出して喜んでいる。美国㊇から中アバ縄の交渉がある。二〇〇丸あり、一丸二円八〇銭で売約した。

▼七月二四日

朝から雨で道路が悪い。道議選に古平から大沢吉三郎氏が立候補することになった。古平としては初めての道議、全町一致して運動することだろう。夜、本鶴間へ行きいろいろ話す。

▼七月二五日

起床六時半、雨のち快晴、暑さが

きびしい。昨日美国(文)から注文の中アバ縄二〇〇丸受け取りに船で来る。┌ヨまで行き倉から出して渡す。のち入船町共立大謀からも受け取りに来て渡す。暑さがきびしく汗ダクダク、┌ヨ重久さん、午前の船で札幌から暑中休暇で帰っていた。午後三時から信用組合で木材会社の総会がある。一割二分の配当があった。〔本〕主人が小樽から帰られる。道議選、大沢氏立候補で熱気が加わる。

▼七月二六日

天気快晴、熊さんは出面六人と草取りだ。九時頃、熊さんと私で┌ヨの倉へ行き、アバ縄の片付けをする。終わって〔田〕の倉へ行き、共立大謀へアバ縄を渡す。共立へ四〇〇丸、(文)へ二〇〇丸出た。合計六〇〇丸、あと四〇〇丸は売りたいものだ。夜、信用組合で産業組合宣伝の浪花節があり聞きに行く。

▼七月二七日

天気快晴で暑さがきびしい。熊さんは朝早くから肥料かつぎをやる。午後は農園で草取り、袋掛けは一段落。店は閑散、ダシ風が吹く。幸治等は暑中休暇なので、文治、吉治、外友達と毎日海や川へ遊びに行く。余市から古平、美国、積丹へ通じる自動車道路視察のため、札幌土木派出所長等が昨日来て、本日、積丹へ行く。

▼七月二八日

起床六時、炎熱激しく近年にない暑さだ。ダシ風激しく砂塵が飛ぶ。気持ち悪い。幸治は家に帰って来て、毎日海や川へ行くのを楽しみにしている。農園も袋掛けが一段落したことで、今は出面六人で草取りをやっている。明日で大抵終わるだろう。畑のキウリ、一昨日から初ものをもぐ。あまり暑いのでタライ行水を使う。

▼七月二九日

起床六時、今日も朝から暑さがきびしい。月末なので九時頃から新地方面の掛取りに出掛ける。一〇〇円ほど受け取る。農園は出面六人で草取り、明日で終わるとのこと、リンゴの袋ずいぶん落ちたとのことだ。小樽┌久リンゴ屋から、西嶋さんが古平のリンゴ作況の視察に来たとて寄る。〔本〕の奥の畑ずいぶん立派になったとのこと。私のところの畑も明朝見るとのこと。新聞によれば二七日午後七時頃、樺太～小樽間定期船大礼丸が、ノトロ岬沖合いで汽船と衝突し沈没、船客一四〇余名、乗組員五〇余名が溺死したとのこと。大惨事だ。

▼七月三〇日

起床六時、洗面後海岸を散歩して後、新聞を静かに読む時が一日中で一番心地よい時だ。この頃は毎日暑さがきびしい。本年の如き暑さ続きも珍しいことだ。幸治、文治、吉治等は、五、長尾の友達連七名で、川遊びに行くとて、ご飯やらしょう油、みそ、鍋を用意して、キウリ、イモなども持って川原で昼食をするとのことだ。六時頃になってようやく帰って来た。一日中よくこんなに遊べるものだ。この時代が一番楽しいのだ。月末で熊さんが掛取りに出かけたが、結果はよくなかった。曽我さんから手紙が来る。農園の草取りもひとまず終わり、女出面も今日限りにした。

▼七月三一日

起床六時、今日はまた晴天、それにダシ風が激しく吹き暑いこと、蒸されるようだ。今年のように暑さの続くことも珍しい。起床早々海岸を散歩し、古平橋工事を見たのち相坂へ行く。午後から新地方面へ行き、帰り∧田へ寄る。女鹿へ嫁さんに行った娘さん、病気で重態とのこと、気の毒なことだ。┌ヨに寄りしばらく話をして三時帰る。のち火防組合で巡回し五時に終る。ダシ風が毎日のように吹く。こんな中で火事でもあれば大変だ。

▼八月一日

今日から八月だ、この年も三分の二を過ぎたのだ。相変わらず快晴で暑さがきびしい。毎日毎日の炎天こんなこともない。熊さんは草取りも一段落したので、上の畑の番小屋建てなどをする。空包発砲の願書を警察に出した。妻は洗濯に忙しい。道議選に余市から憲政会の照井氏が立候補したので、これではますます混戦となる、大沢さんもなかなか容易ではない。去る二七日の大礼丸遭難は近来にない大惨事だ。船客一四〇余名、船員五〇余名のうち二五名が助かり、あとは溺死とは気の毒なことだ。

▼八月二日

相変わらず快晴、近ごろのこの暑さには閉口する。∧田から女鹿さんへ嫁いだハルさん、長らくの不快のところ今朝亡くなられたとのこと、気の毒なことだ。九時頃自転車でお悔やみに行く。

美国(又)から並アバ綱五〇丸注文があり馬車二台で送る。倉入りの分あと一九個だけになった。道議選は日増しに激烈になる。大沢候補の運動員も活躍している。𠆢田へ通夜に行ったが夜になってもむし暑い。一〇時帰る。

▼八月五日

今日八時半の富丸で小樽へ出かける。大沢候補は余市方面へ転戦した。一一時二〇分発の列車に乗り、十二時三十分小樽着。岡崎でしばらく話し、二時頃(平)へ行く。ちょうど二人共いたので久し振りに話をする。暑さのきびしいこと皆裸でいる。白玉氷水を馳走になる。いろいろ話し八時に帰る。暑いので岡崎の家の前に椅子を出し、お姉さんと一時間ほども話をし一一時休む。

▼八月六日

昨夜来からの雨、今朝七時頃まで降ったがのち晴れた。朝食後用足しに出かけ𠆢平に寄る。[田]、[刀]に行き決済を済ませる。二時から公会堂で高峰平三郎先生の講話があるので行ったが有益な講話であった。五時に終わり(平)で夜食をし、七時から道会議員選挙、秋山、井尻両候補の演説会を聞きに行く。一〇時に帰り休む。

▼八月七日

今日は天気快晴だ、午前中手宮魚市場に行き、[田]に寄り昼食、公会堂で医学博士三名の衛生講話があり聞きに行く。二時に始まり五時に終る。のち岡崎別荘敷地の方を見て帰ったのは七時、夜食後、電気館通りの夜店をブラブラ歩く。さすが都会だ、よくこんなに人が通るものだ。高太郎さんのところへ寄ったら奥さんが一人居た。若林さんが𠆢平にいるとのこと。私もお菓子とバナナを買い𠆢平に行く。曽我さん、𠆢平さん等がおり、いろいろ話し一一時帰って休む。

▼八月八日

今日は古平へ帰る日だ、尾崎の二階で休んでいたら四時頃、共栄丸の船頭さんがこれから出帆するかと教えてくれた。早速洗面し、大急ぎで家の前に泊っている船に乗り込む。すぐに出帆した。こんな好都合なこともめったにない。夜明けの小樽港を甲板から眺める景色は何ともいえず気持ちよい。高島岬の辺りから船の中に入り休む、海は上ナギで実に気楽だ。九時半(カ)前の浜に着き上陸する。家に着いたらあまり早い時間に帰って来たのでビックリしていた。

▼八月九日

今日はまた快晴、ダシ風がはげしく砂塵を飛ばす。寒暖計は八八度F(三一度C)近来にない暑さだ。一〇時頃新地の銀行へ行き預金、帰り[ヨ]で昼食を馳走され一時帰る。一時半から禅源寺で大沢候補の政談演説がある。広谷、椎熊等が応援弁士だ。三時半に終わる。夜、𠆢今寺田の通夜に行く。あまり暑いので一一時頃まで戸外で涼む。

▼八月一〇日

朝から八〇度F以上(二七度C)の暑さは内地にいる時と変わりない。本年のようなことは何十年稀なこと、従って砂地などの作物、大根、イモ、ナスなど枯死したところが沢山ある、どうかして大雨が欲しいものだ。今日は選挙当日だ、昨夜来、照井、山の内が猛烈な夜襲戦をしたとて大沢派は大いに緊張し盛んに活動している。父も八時頃投票に行く。古平は九分通り大沢のものだろう。𠆢田寺田の葬式を送りに行く。例によって暑いのには閉口した。

▼八月一一日

昨日で終了した道議選の投票箱、本朝、船で倶知安の支庁行き。投票結果は如何、禅源寺で午後二時から高峰先生の講演会があるので行く。「日本の問題と国民の覚悟」、有益な講演であった。

▼八月一二日

七時起床、毎日の酷暑と快晴の天気には閉口だ。ひと雨降らねば畑作物は枯死するものが相当あるだろう。高峰先生の第三回目の講話がある。演題は「平和の基礎」、家内の和合が第一、いろいろと例を引いて説かれた。去る一〇日の道議選、本日倶知安にて開票、刻々と電話で結果が入る。正午までは大沢下位で如何、と心配していたら最後に最高点の栄誉を得て当選、実に古平にとっても名誉なことだ。

当選者

大　沢	一、二九四票
山　内	一、二四八票
小　森	一、一五八票
出　町	一、〇〇六票

次　点

照　井	九〇八票
阿　部	七四八票
八　木	六六三票

— 続く —

地方自治の移り変わり
―蝦夷地から北海道へ―

□町会議員選挙

町村自治ということから見ると、北海道の一・二級町村制は住民にとって充分なものではなかったが、それでも本州並みとはいかないまでも、自治体としての体制が形として出来てきた。

古平町でも今までは三個所に戸長役場があり、定められた職務に従って末端の行政の仕事をしていたが、新しく町村役場として行政に当たることになり、役場庁舎も必要になってきた。明治二七年、札幌県の時代に新築の上申をしていたが認められず、そのまま従来のものを修理して使用していたが、今回は元公立病院の建物を引き継ぎ、改装をしてこれを庁舎として使用することにした。

※この建物はその後払い下げになり、民家として利用されてきたが、老朽化が進んで現状を維持することが困難となり、歴史と由緒ある建物だったが今年一〇月末に解体されてしまった。

また戸長役場の時代には総代人というその地域の代表者がいたが、議会というようなものはなかった。新しい町村制度により古平町でも**町会議員の選挙**が行なわれ、先のように一二名が選出された。

町会議員の定数は次のように定められていた。

一、人口千人未満は議員四人
一、人口千以上二千人未満六人
一、人口二千以上三千人未満八人
一、人口三千以上五千未満十人
一、人口五千人以上　十二人

このような規定はあったが、町村の状況により四人以上十二人の範囲で増減することができるとした。
（この外の規定については略）

古平町は人口五、三九八人であったので、この規定に従い定数一二人としたが、**町会議員の選挙権**については次のように定められた。
（第二十条の項目）

▽満二十五歳以上の男子で
▽町内で一戸を構え
▽一年以上町内に居住していて
▽地租年額十銭以上、または直接国税と北海道水産税五十銭以上、または耕地一町歩か宅地百坪以上を所有、または平均額以上の町村税を納めている者

条項の中には、租税を滞納して処分を受けている間は選挙権を停止するともあり、なかなか厳しいものがあった。

選挙権のある者はすべて被選挙権（立候補することができる）があり、また**代理人投票**が認められていたが、次の者は被選挙権がないと定められている。

1. 北海道庁の官吏
2. その町村の有給吏員
3. 検事、警察官吏、収税官吏
4. 神官、僧侶、宗教師
5. 小学校教員

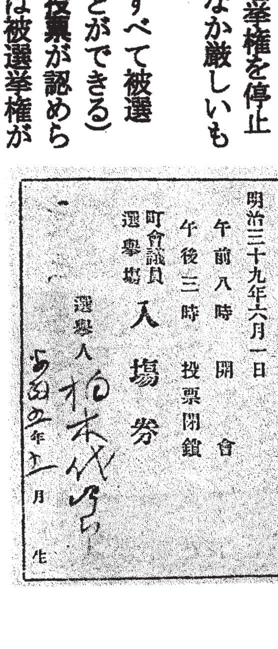
などであった。

町村会議員はその規則の中に、「**町村会議員ハ名誉職トシ、ソノ任期ハ二箇年**」とあった。

代理人投票が認められたことで思わぬ問題も起きた。

代理人は委任状をもらい、それを町長に提出して代理人投票ができた。それで支援者は、投票に行かない人がいると委任状をもらおうとする。一方、委任状を出した人の中には、後からまた誰かが来るとその人にも委任状を渡してしまう人もいて、いざ投票するときになって、委任状を持っている同士でいざこざの起きるようなこともあったという。選挙ということにまだ慣れていない当時はいろいろなことがあったようである。

←町会議員選挙場入場券


明治三十九年六月一日
午前八時開會
午後三時投票閉鎖
町會議員選擧場
入場劵
選擧人
年　月　生

□町村制一年目の財政

二級町村となり歳入・歳出の予算が編成された。（少額の項目略）

歳入（円未満切り捨て）

総額	一八、三九九円
町税	一三、七二六円
雑収入	二、〇八九円
借入金	一、四〇〇円
地方交付税	二五九円
その他が	九二五円

歳出（円未満切り捨て）

総額	一八、三九九円
役場費	四、一五七円
会議費	三五四円
教育費	八、九九五円
警備費	一、〇八二円
衛生費	一五六円
土木費	三三〇円
予備費	七〇〇円
町公債費	一、四五六円
その他	一、一六九円

歳入では鰊漁の好況から、漁業からの税収が町税の四割を超えていた。一方の歳出では教育関係の支出が四九％とほぼ半分を占めていた。近代国家へ向けての義務教育も軌道に乗り、教育の充実発展は国策でもあり、教育の問題は優先して取り組まれていたが、各自治体にとっては以後も教育費が大きな負担となっていた。

□国政への参政権

帝国議会への参政権は明治三三年になってようやく得たが、実際の選挙は三五年の総選挙からの実施となった。**衆議院議員は札幌・函館・小樽の三区から定数は各一名**であったが、国会が開設されたことにより、道内でも北海道会設置の運動が各地で盛んになってきた。

明治三四年二月、北海道会法案が衆議院に提出、同年三月に可決された。これによって同年八月、待望の**第一回道会議員選挙**が行なわれ、立候補したのが六九人で三五人が当選した。このときの全道の総人口約一〇一万人であったが、有権者は一二、六三五人で、**総人口の約一・二％**に過ぎなかった。

選挙権のあるのは、

①成人の男子
②三年以上北海道に在住し、
③直接国税三円以上、または土地四町歩以上を所有している者

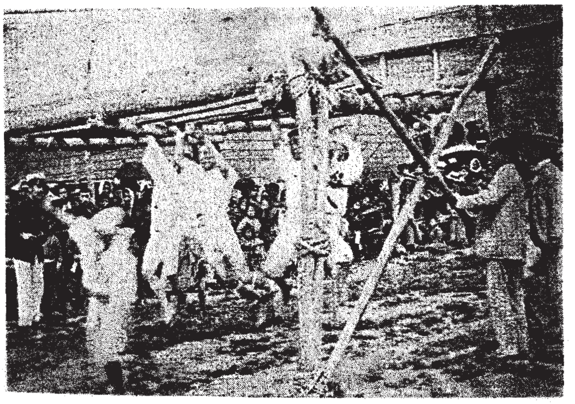
とされた。

□青年会活動

古平町が二級町村になったことは町民にも活気を与え、青年層の活動をいっそう盛んにすることにもなった。

これに先がけて、浜町では古平実業青年会が組織され、翌三五年には沖村の壮青年四三名が沖小学校に集まって、沖村青年協会を創立した。その目的や事業として、

一、学事を研究し互いに智識を交換すること
一、天災事変に際しては部落の自他を問わず救護に従事すること
一、道路修繕その他公益的労役に従事すること
一、陰徳的（人知れず行なう善行）に山野に植樹するなど
一、公共心の養成に努めること



←第一回古平青年団運動会

明治三五年就任した田村和六町長は、古平尋常高等小学校長管村純之や町内の青年代表と協議をし、町民有志からの寄付を得て、第一回古平青年運動会を開催した。

発起人となったのは田村町長、管村小学校長ほかの青年有志は、湯田勝太郎、大竹忠、松崎亀二、興津佐吉、田口時雄、石田茂夫、高野豊吉、松岡利三郎、竹内厚、岡本善太郎、米田守治、藤原一郎 等であった。

内地 ということ

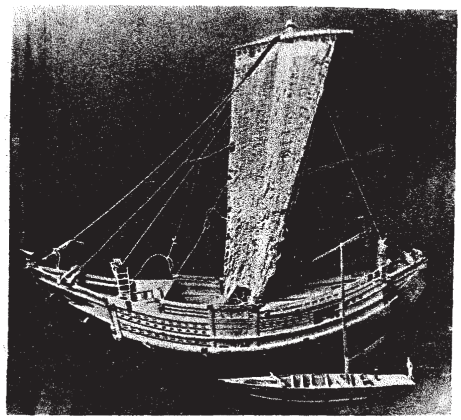
古平では戦前まで―イヤ現在でも、まだ本州のことを内地という人がいますが、内地の反対は外地（がいち）です。内地というのは、その国の領土で、新しく領土となった以外の土地のことで、戦前だと朝鮮・台湾・樺太などが外地で、本州・四国・九州・沖縄・北海道（千島列島の一部）と、その地域に含まれる島が内地です。

北海道へ移住した人達は、生まれ故郷を懐かしんでか本州を内地と呼んでいました。これは明治のはじめからあった呼び方ですが、明治六年、開拓使は規則を出して、「公文書に北海道を北地、道外を内地ということは止め、すべて北海道、他の府県ということ」としました。

沖縄でも本州のことを内地というそうですが、この習慣はなかなか抜けないようで、年輩の人は今でも内地といい、一般には内地米という言葉も普通に通用しています。

ところで「ないちまい」とパソコンに入れますと、「内地米」とは出ないで「泣いちまい・鳴いちまい」と出てきます。

蝦夷地と言われた頃から、その恵まれた産物を本州方面に運ぶために船の往来があった。早くから住んでいたアイヌの人達は小舟で本州はもちろんのこと、遠くシベリアの沿岸まで交易に出かけていたという。昔から海は大きく開かれた交通路であった。



←古平場所請負人であった岡田家所有のムシロ帆の北前船

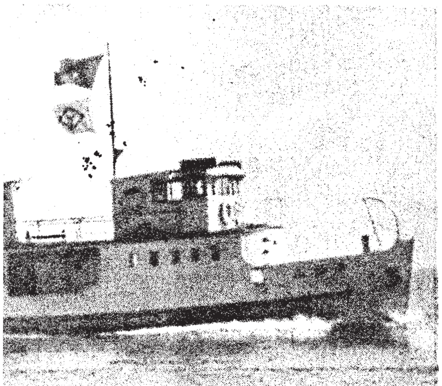
早くから開けた福山（松前町）や江差周辺から、鰊の北上と共に日本海沿岸は鰊漁による繁栄で賑わい、それにともなって、北前船による本州各地との航路が経済の大動脈となっていた。

その頃から南の茂津多岬・積丹半島の神威岬・北の雄冬岬は、船乗り達からは《日本海の三険》と恐れられた難所であった。

古平町セタカムイ岬と余市町シリパ岬との間の海岸線は、延々一〇キロ余りの断崖絶壁が続き、その間、小さな川のわずかな流域に村落が点在していた。そのところどころに大小の石の打ち寄せられた海岸が広がっている。

昔から陸の交通路は山の斜面に沿ったけもの道を利用し、幾つかの峠を越えて余市まで徒歩で行くしかなかった。道路の開削や改修が行なわれ、ようやく自動車の通ったのは大正の末頃で、定期的に運行されたのは昭和三年であった。

半島の生命線
国一定期航路



活躍し、親しまれた<金勝丸>

一方では、海に面していたことから海運は早くから開け、北前船の時代から海運による経済活動は活発であったが、それらは物資の輸送で人の往来はごく限られたものでしかなかった。

明治一五年、沢江村の保木嘉七が帆と二丁櫓（ろ）の川崎船で余市まで運行していたが、明治四十五年頃、石油機関を取りつけたとある。

明治三五年、函樽鉄道㈱によって鉄道が小樽まで延長され余市停車場が設置されると、余市と古平・美国の交通もいっそう盛んになってきた。

その年、湯内（現在の豊浜町）の小黒濱蔵が古余丸（九・九トン）で鰊漁の枠引きなどをしていたが、鰊漁期が終ると、古平町で回船業をしていた小町泰次郎と共同で余市～古平間の運航に当たっていた。

それより前の明治一三年、小樽～函館間の定期船が運行すると古平にも寄港するようになり、小樽手宮～札幌間の鉄道も開通して、古平からの物資は小樽を経由して各地に輸送されることが多くなった。

明治三十七年、函館～小樽間の鉄道が全線開通すると、古平の小樽への依存度はますます高まってきた。

それ以前にも小樽への物資の輸送には、帆装した一〇トン程度の川崎船が運航していた。三人ほどが乗り風の無い日は櫓を押して航海したが、その後、八馬力程度の石油機関を取りつけて運航していた。

明治三九年、小樽港を出航し、積丹半島東北沿岸部の港に関係する出帆広告（小樽新聞）

沿岸航路　大勢丸
古平・美国・積丹　隔日午前八時
積丹丸　古平・美国・入舸・来岸・余別　隔日午前八時
古余丸　湯内・古平・美国

毎日午後二時

美国丸　美国・古平（時刻不明）

海路だけではなく陸路も明治四〇年、稚内から函館までの仮定県道西海岸線が決定し、その内の余市から積丹半島先端部までの工事は三つに区分され、余市～古平間は両町の地元負担で、明治四一年末に古平街道として三一キロが開通した。道幅も広げたが人馬が通行できる程度の曲折した山道であり、これまでの急坂などもなくしたため回り道になり、そのために道路が改修されても、近道の旧道を歩く人がいた。しかし何と言っても船が便利であった。

鰊漁が盛んになると出稼ぎの漁夫や行商の人達で船はいつも満員であった。余市や山麓方面の農作業の季節や年中行事には定員を超える乗客で混雑した。

交流が盛んになると、余市との陸上・海上共に交通の必要性が急に高まってきた。

大正二年、沖村田岸貞治が小町泰次郎と共同で古英丸（蒸気船）を購入し、鰊漁で枠引きなどを終えた後、大正九年まで古平・余市・小樽間の運航を続けていた。

大正五年、余市町甲谷定次回漕店が、猪股汽船の援助を受けて、富丸（三二トン）で余市～古平～美国間の定期運航を始めた。乗り降りするための設備が無かったので、岸からの艀（はしけ）によって本船との乗り降りをした。古平では浜町（本陣の浜）・港町（新地町十字街下）から回漕店の艀が出ていた。

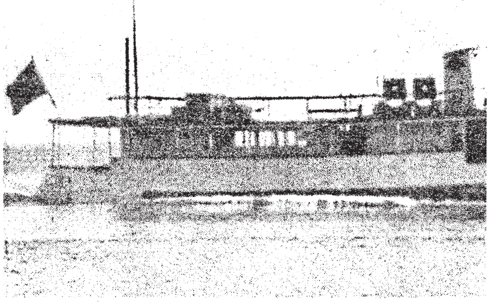
浜町方面は先の保木嘉七が回漕店として乗り降りの艀の取り扱いをし、新地町方面は岩井回漕店が取り扱った。また同じ頃、余市町橋本汽船が砂川丸を運航し、古平では高橋治助・高杉二郎・能登フク回漕店などが取り扱っていた。両船共午前九時、午後二時に古平発、午前一一時半、午後三時半に余市発という運航時刻であった。

余市では『余市小史』によると、大正一二年頃、余市町小原楠次郎が、余市～古平間に末広丸を（二四トン）を運航したので甲谷回漕店との間の競争が激しくなり、乗船キップを買うと手ぬぐい、ハンカチなどをサービスするようになり、さらに余市駅から茂入の乗船場まで客馬車で運ぶようになった。運賃も大人一人三〇銭だったものが二五銭、一〇銭と下げ、無料という日もあったという。小原回漕店では大正一三年、艀による乗り降りの不便をなくするために、工費三千円で専用の茂入桟橋を新設した。

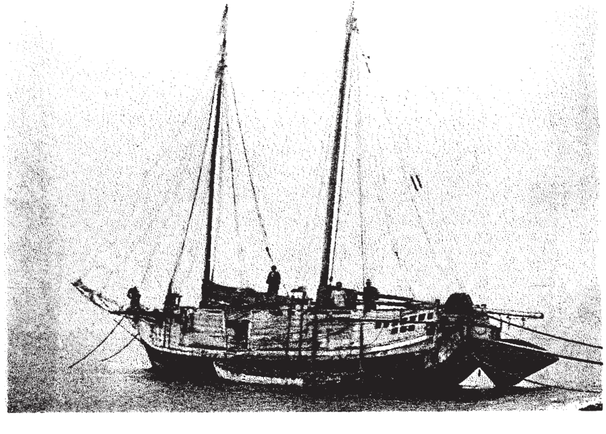
大正年間の一時的ではあったが鰊の不漁もあり、古平～小樽間の汽船の運航が途切れがちになり、また川崎船が復活したが物資の滞貨を見るようになった。

陸の孤島・積丹半

余市⇔古平⇔美



↑ 最後の定期船として活



← 本陣の浜に接岸している合いの子船（明治後期）

〈余市水産博物館学芸員の浅野さんを通して、元余市汽船㈱社長の林さん宅から金勝丸の写真と、パンフレットをお借りできました。掲載の写真はパンフレットからの複写です。ありがとうございます〉

番茶の味

大澤文子

立冬…と暦は報じた。猛暑も過ぎて降雪も近いというのであろう。今年は特に雪虫が大発生、衣服に顔に吹雪のように群がり眼もあけていられない、うっとうしさ。ケヤキフシアブラムシともいう…とか。

今頃になると各家庭では漬け物の支度に忙しい。主婦達は庭に莚を敷き、洗った大根を一本一本丹念に縄で編み、軒下に下げて干す。秋の風物詩として懐かしみを覚える。

まあ現在の建て家では無理であろう…が、振り分け荷よろしく無造作に生け垣、塀などにかけてある大根を見ることもあるが…。

そんな時、ふと若い衆の出入りの多かった海辺近くのわが家を思いおこす。毎年漬け物は二斗樽、四斗樽に漬け込んでいたが、からになった樽を春になると波打ち際まで運び、藁縄を丸めて作った束子で洗わなければならなかった。冷めたくて手はかじかみ、「つらかったなァ」と今でも思う。あれから漬けることもなくなった樽は、物置にしまいこんでおいたが箍がゆるみ、手を触れるとカサカサとくずれそうになる。思い出すと今でも悲しみを覚えるのは何故…か。

そんなことを思いながら先日、病院の帰りに足の運動と称し、いつも乗るバスの停留所を二か所ばかり通り過ぎ、北三条東七丁目の停留所まで歩いた。生憎ありなしの小雨が降ってはいたが、バッグの中から三つ折りの傘を出す程でもないとバスを待った。だがどうしたわけか定時を過ぎても到着しない。共に待つ女性達もいらいらと幾度も時間表を眺め文句を言う。しめっぽい小雨は髪を濡らす。

ふとその時、「どうぞ」の声に「えっ！」とわたしは振りかえった。すらりと背の高い好青年がビニールの傘をさしかけてくれているのだ。紺色の作業服上下を身につけた青年が笑顔でわたしを見下ろしている。

今まで男性の方から傘などさしかけてもらったことのないわたし。どぎまぎして、

「いいんです、いいんです…」

と、私からぬ言葉を発し頭を下げた…とその青年はこともなげに言う。

「女性よ、わたしは…」

再び驚きの溜め息をつく私、あわてて、

「ごめんなさい」

と頭を下げた。

髪も七三にわけ、背も高く仕草も男っぽい、よく言う男装の麗人（？）か…。一問一答しているうちにやっとバスは見えたが、止まることなく過ぎて行ってしまった。女性達は放心したように見送る。やがて百メートルぐらい過ぎた個所で止まり、パチパチとしきりに点滅しはじめた尾灯、

「あれ！　あれはなによ！」

女性達は一斉に声をあげ、

「こいこいと言ってるのよ！」

といい走り出した。運転手らしい男性がゆっくりそのバスから降り、走り出す女性達には見向きもせず、男装の麗人（？）を男性と思ったのであろう。ペコペコ頭を下げて謝っている。女性達はブツブツ言いながらバスに乗りこむ。私も仕方なくバスに乗りこみフーッと息をついた。作業服の彼女の誘いに側の席に座る。

「どうして男性の姿にしているの？」

つまらない質問をしてみた。

「そうね、仕事面のこともあるし、第一ね女性の装いは似合わないのよ」

とこともなげに言う。

西武デパートの前で私は下車した。作業服の女性も降り、キップを運転手に渡した時、やっぱり運転手はペコペコ頭を下げ

「いやァ考え事をしていたんでねぇ。すみませんでした」

と謝っている。

女性達には声もかけない、何故？　私はムッとして何か意地悪を言うつもりだったがやめた。作業服の彼女はあのビニールの傘を高く幾度も振り、

「元気でネー、またネー」…と私を見送ってくれた。会ったばかりで名前も知らぬひととなに…。

運転手のことなど忘れフーッと私の心に流れるものはなに？ほのかな「番茶の味」…か。

札幌通信　第35信

桜の咲く日まで

吉　川　義　雄

激浪に押し流されているような、無我夢中の日が続き、涙の枯れた日にそっと指を折って見ると、妻の死から今日で四十日経っていた。

私が、呆然としていようといまいと、亡き人を送り出す手順は決まっているようで、取りあえず遺骨はわが家に妻の写真と共に飾られ、明後日は早くも第六夜。さらに七日後の今月二十一日は、わが家での最後の別離、四十九日の法要となるようだ。

すべての儀典は数人の身内と、学会の仲間達が当初から駆けつけて来て、モノの見事に執り仕切ってくれているから、有り難いと言う意外にない。

みんな日頃から法華経を読み、妙法を唱えている人達ばかりだから、儀典の本義を心得えていいるし、何よりも生前の妻との交わりも深く、私以上に悲しんでいる人も多い。

「あのネー、遺骨の埋葬は来年の五月にしてほしいと、みんなの意見です。」

長男が私に告げた。

言われるまでもなく、私自身が思っていたことだからアッサリ決まった。

妙な想い出になってしまったが、昨年の五月半。前年の早過ぎて蕾ばかりに懲りて、満開の桜をねらって、長男の車が「厚田墓苑」に駆けつけた。

八千本といわれる満山の桜は見事な満開。大変な人出で、ここが墓地であることに妙に違和感を覚えるほど。わが家の墓には誰の遺骨も入っていないから、なおさらに申しわけない桜見物だけとなる。

桜の下で長男が写した数葉の写真の中で、妻がまぶしい笑顔を見せている。

積丹半島の山脈が、海上に裾を煙らせて連なっているのが望見できる。

師を敬愛して止まない池田三代会長が、厚田村を故郷とする戸田会長の名を冠して、心から造成したのがこの墓苑である。

この丘がまだ藪わらそのままのころ、池田先生の叫びを直接聞く機会があった。

「ここを最高の楽土にして見せる。冬の雪も、夜の寒さにも邪魔をさせない。世界中から、やがて沢山の人が来るのだ……」

墓石に大小の区別はなく、行儀よく同じ形で並んでいる。

「満山桜で飾る……」は、ほとんど完成かに見えるが、谷を越えて伸びている墓苑は「世界の聖地……」になる日まで、美しく変貌を続けるだろう。

「先生、人は死んだら、ここに何時まで居るんでしょうか。」

ある時、誰かが甚だ興味深い質問をしたことがある。みんなカタズを飲む思いで師の返事を待った。師の言葉はほとんど即答であった。

「ここには居ないよ。お墓は皆さんが今世に生きていた記念碑であり、世のため人のために、広布に戦ったという証だよ。」

明快極まる師の答えに納得したものだった。

人の世で、死ほど悲しいものはない。物心ついて今日まで、いったい何人のひとと別れの悲しみを交わすのだろう。

また逢う日があるのかないのか、真面目に仏法を勉強しても、頭の中で考えて答えの出てくる問題ではない。

仏と崇拝される生命が、至高の答えを出してくれているが、こちらの悟りが追いつかないから、頭の中で堂々めぐりし、加えて現実の悲しみやら涙やらが、やたら邪魔をして、自分で納得できる答えなんかないようだ。当分じっくり悩み抜こうと思う。

戦中中難　戦後後難

泣き笑いの樺太漁場体験記

吉野慶一郎

　今日の密航船の使命であるK氏の救出を見事に成功させたのは、ひとえに山さんの身を挺しての義侠心のおかげでした。樺太で長年漁業に従事した豊富な体験談を聞けるのと、真面目な性格を尊敬しながら仲良くしていました。この人ならと見込んで、K氏救出のことを依頼したかいがありました。ガスの利用を考え着いたのも、山さんの話にヒントを得たからでした。

　この恩義は金銭に換えられるものではありませんが、取りあえずと寸志と酒を添えて厚く礼を述べたところ、山さんは、

「吉野さんの人助けの話に感心してホンの手助けをしただけ、日本人だったら当たり前だ。礼金なんかいらない。だが折角だから好きな酒だけ貰うよ。今日は気分がいい、晩酌が楽しみだ。また何かのときは知らせてくれヨ」

　人は何時どこで、どんな人の世話になるか分かりません良い人との出会いと、平素の人との付き合いの大切さを痛感いたしました。

　この日の夕方、帰港の門限が過ぎても渡辺船頭の漁船は帰りません。「これで良し」と、内心喜びながらも落ち着かぬ一夜を過ごしました。

　そしらぬ振りをして翌朝、港へ様子を見に行きましたが船は帰っていません。港内は漁船が出漁したあとで人影もまばら、特に沿岸警備隊の動きもなく平常のどおりの風景で、何か拍子抜けをした感じでした。顔見知りの漁業者がやって来て、

「昨日帰らない船があったが、今朝出漁前に皆で騒がないようにしようと相談したところだ」

と、教えてくれました。これには私も賛成です。密航船をうらやむ余り騒ぎ立てるのは、自分のためにも不利だと悟ったからでしょう。もっと以前から助け合っていたら密航船の成功も高かったはずでした。

　私はこのときふと、こんな場合沿岸警備隊は何を考え、何をするのか聞いてみたいものだと思いつき、勇気を出して隊長を訪ね質問をしてみました。

「昨日、帰港しない漁船があると聞いたが本当か。遭難のおそれもあるから、一刻も早く日本漁船と共に捜索救助に出動するのが任務ではないのか」

という意味のことを、通訳を交えずにぶっつけてみました。

　すると隊長は、

「帰港しない船のことは分かっている。今のところ真岡、本斗の警備隊からは事故や遭難船の入っていないので、監視艇も救助艇も出ていない。場所も分からずに救助に向かう必要はないし、もう少し様子を見るほか仕方がないだろう」

と不機嫌な顔での返事でした。密航船と察知していても追う術もなく、責任上それを口に出せないいらだちと憤りが、隊長の表情にもよく現れていました。

　いま返事で図らずも、隊長が私の船の無事を証明してくれたようなものだと、北海道への到着を確信し、早速、山さんにも知らせて万歳を叫びました。

　話が前後しますが、船が無事に北海道へ着いていたことを知ったのはそれから約一年後、私達家族が古平へ引き揚げて来てからのことでした。そしてK氏や渡辺船頭とも再会を果たし、幸運を喜び合ったのでした。

　さて、重い荷を肩から下ろしたような思いで楽な気持ちになり、私はまた漁船で手繰り漁を再開し漁業に専念しました。水揚げもどうやら順調で平穏な日々？　でしたが、抑留中の私達にとってみれば、それは『ホンノひとときの平穏』とでも言うべきでしょうか。

　そんなとき突然、沿岸警備隊から出頭命令が来たのです。

—続く—

老兵の綴り方
あゝ樺太国境守備隊
35　橘　義春

師走川陣地陥落 北極山へ撤退～続き

八月一二日に武意加陣地方面から侵入したソ連軍に対し、同地区を警備していた岡島小隊は幌内川の橋を爆破し、道路に木を切り倒して障害物とした。このためにソ連軍の進撃は遅々として進まず、武器、弾薬を両手にかざし、腰まで水につかりながら行軍したという。しかし、一三日未明には古屯の西台地に到着していた。

ソ連軍は古屯を前にして日中は動こうとしなかったが、夜になってから行動を開始し、古屯駅や古屯橋一帯を一挙に制圧した。敵軍の主力は八方山陣地にあり、古屯には歩兵一個小隊と、輜重兵大隊、若干の憲兵隊がいるだけだった。ソ連兵が古屯を攻略すれば、八方山の日本軍の主力は完全に孤立状態になる。武意加方面のツンドラ地帯を突破して来たソ連軍の意図は成功したようなものかも知れない。

古屯の情勢を憂慮した連隊長は、気屯にある第二中隊、それに教育隊と重迫撃砲四門、速射砲、歩兵砲、機関銃でにわか編成した西沢隊に、古屯救援に赴かせるよう指示を与えた。連隊長の命令で気屯を出発した救援部隊は、一四日の払暁攻撃によって古屯を奪回すべく、夜明けの霧の晴れるのを待ってじりじりと前進を開始した。

各隊は山砲、歩兵砲、機関銃など持てる火力の総力でソ連軍に迫り、一挙に突撃を開始しようとしたとき、六〇メートル程前方に強力な火力を敷いていたソ連軍の猛射を浴び、第二中隊長佐竹中尉以下数十名が壮烈なる戦死を遂げた。

しかし、指揮官西沢中尉らはこれに屈せず果敢にソ連軍陣地内に突入し、大いに敵の心胆を寒からしめたという。敵はわが軍の猛烈な攻撃に耐え切れず、遂に交戦一時間余りで東側の森林に敗走した。

そして午前一〇時頃、敵は戦車三台を先頭に第二中隊の側面をついて来た。一時敗走した敵は、これに勢いを得て再び攻撃をして来て大激戦となった。このためいったん攻撃を中止、再挙を図るため気屯へ後退した。

かくて古屯救援部隊の攻撃は失敗し古屯駅の奪回はならなかった。私達は古屯の兵舎付近まで来たが、敵が出没しているので夜になるのを待って兵舎へ入ったが、駅とは二キロくらいしか離れていなかった。古屯の第一大隊の実兵力は歩兵一個小隊、機関銃二個小隊、歩兵砲一個分隊（砲はゼロ）、通信隊二個分隊、それに師走川戦闘の生存兵など、全部合わせても二〇〇名足らずという兵力だった。夜も深まった頃、日本軍得意の切り込み戦術で大いにソ連軍を苦しめた。ソ連戦史は、古屯攻防戦についてその苦戦ぶりを率直に認め、こう記している。

「── 日本軍は古屯確保の必要性を充分感じてか絶えず反撃を繰り返し、第二防御地帯の気屯からも兵力を注ぎ込んで来た。わが第百七十九狙撃連隊は、このため容易に進出できなかったばかりか日本軍の攻撃に気息えんえんだった。敵は態勢を立て直し夜間猛烈な逆襲に転じ、彼我の間に激戦が展開された。わが軍は現有地を確保し続けることが困難になってきた。この情勢を見た第五十六軍団長は、戦車一個大隊、砲兵一個連隊を増派する処置を講じた。第百七十九狙撃連隊は苦境を脱し敵の攻撃を撃退、さらに二個中隊の兵力の増強を受け、八月十五日、偵察支隊との連絡に成功した」

（防衛庁公刊戦史より）

＜続く＞

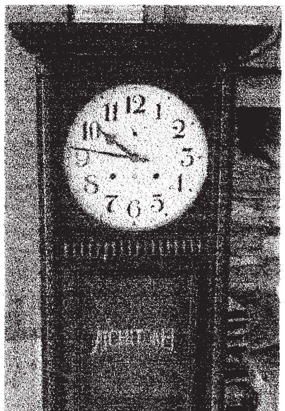
新雪の上ゆく狐の足跡も元朝の眼に清がしく写る
雪野ゆけば地吹雪遠く迫り来てつひに己れを包みてしまふ
寒に入り凍ばれれば木木に咲く霧氷を成して今朝のかがやき
窓を覆ふ氷華の冴ゆるこの朝なすべき仕事持ちて惑はず
雪の野のチョペタン川に落差なす水の流はそこのみ光る
吹雪の夜白煙あぐるチョペタンの峡に抱かれて眠らむとす
越冬を遂げて寄りゆくわが歩み影なす弥生のチョペタン川に
風押せば水面にゆるる一ところ動きの見えて黒きチョペタン川
恨らみがましき思ひに耐へて覗くとき水面に鬼の形相うつる
むき出しの古平なまり諍ふが如く言ひつつ人親しみむ

チョペタンの里

瀧内優子

春めける日差しかがやき一位の樹身震ふ如く雪ふり落とす
やうやくに黒土にほふ四月尽庭芝すがすがと新芽萌えそむ
ひとり静峡の草生の中にして淡あわ咲けばさみしきものを
花すぎて若葉をわたる風の音春はひそかに去りゆかむとす
人しげき往き交ふかたへの峡川に鴫の来てゐることも親しきゆる
やかに時ながれゆく古平は鼓動の如く海鳴るばかり
みる間にし霧はながれて月かげりチョペタン川の一筋見ゆる
チョペタン川の泡立つ川面を目に追へば鮭の産卵ぞ茂れる木の下
雨多きチョペタン川の激つる音山にひびきて夕暮となす
哀哀とたつチョペタン川の音絶えて峡の川辺は寂かにくるる

おじいさんの「大きな古時計」



風間孝一さんから寄贈

浜町で大正初年頃から時計や印鑑類の販売・製作をしていた風間時計店が閉店しておりましたが、この度、古平町を引き払って営業することになり、店舗をかねた住宅共に取り壊すことになりました。それで店に保管されていた各種時計、その他多くの商品や、当時の商習慣を知る古い帳簿類などを町でいただきました。

振り子式の掛け時計は縦一四二㌢、横五二㌢大きなもので、聞くところでは昭和四〇年頃、積丹町のある旅館に納めたところ宿泊客から、一五分ごとに鳴るウエストミンスター寺院の鐘の音がうるさくて眠れない、と苦情があったので引き取ったものだとのことでした。

あまり見ることのない、どっしりとした貫禄充分な立派な時計です。もちろんネジを巻くと時を刻み、澄んだ鐘の音を響かせてくれます。

外に数十本の印材（角や楕円形）もいただきましたが、これはいかに有効活用するかを思案中です。

短歌

古平町岬短歌会

木洩れ日に吹き出づる名水輝くに見上げて佇てば山鳥の声
池田テル

冬越しを試み庭に置くゼラニウム今朝は初めての雪降りかかる
鈴木時子

夕日うけて一段と色鮮やかなナナカマド間なく雪虫の来る
竹内コト

晩秋に花壇の片付け気がつけばこぼれし種の若芽育ちて
田中香苗

秋深く素枯れし庭の片隅に遅れて咲きし酸漿（ホウズキ）の映ゆ
丹後初江

頂上に立ちて汗したシャツ絞る膚に優しき沢の風吹く
寺田清治

刈り取りてはさに掛けたる黒豆のかそけき音に豆とびちらふつづく
東美知

どこまでも穂薄揺れてゐる原に夕日落ち影絵を見るが如しも
堀典子

俳句

古平俳句会

大根抜き洗ふも干すも老い独り　斉藤波留

お日和や大輪の菊垣根越し　山口悦子

達磨忌や描きて法灯拝みけり　越野敏雄

末枯れしものにも惜しむ心あり　大和田絵伊

木から木を飛び交ふ鳥や秋深し　高橋重子

連れ合ひのバック持ちやる秋ぬくし　仲谷比呂古

稜線に起伏を見せて秋の潮　室谷弘子

退職の残る一年天高し　泉清三

廃屋にコスモスが咲き風匂ふ　外山俊久

雨音の聞く度夜寒募りけり　渡辺嘉之

火の海に入りゆくごとく紅葉山　堀典子

釣船の湾を狭しと秋晴るる　本間寿昭

小鳥来てより山宿の覚めにけり　越野清治

古平町史年表

昭和16年（1941）～続く

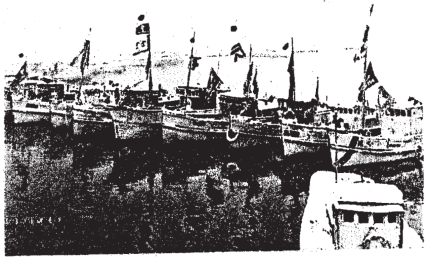
▲稲倉石産業報国会が会旗の入魂式を行う

▲稲倉石国民学校が校旗を制定する（稲倉石鉱業所が寄贈）

▲町内会ごとに焼夷弾を想定した防空消火演習が行なわれ、その後も定期的に行なわれるようになる

▲古平信用購買販売組合が購買販売事業と魚菜市場を古平漁業会に譲渡する

▲信用組合（略称）では漁船の外に運送船１隻を建造することになり、船名を「組愛丸」とする



↑信用組合が建造した漁船（11隻）

昭和17年（1942）

▲対米英開戦により毎月８日を大詔奉戴日と定め、これまでの興亜奉公日は廃止される

▲みそ・しょう油の切符制、衣料品の点数制が実施になる

▲塩も割り当て配給になる

▲後志国民学校スキー大会に出場し、初等科の部で２位に入賞する

▲愛国・国防会などを統合して大日本婦人会が創立、これによって町内でも大日本婦人会古平分会が結成される

▲食料管理法が公布され、古平食糧事務所長に役場吏員の武川清が任命される

▲シンガポールが陥落し、祝賀の旗行列が行われる

▲大日本婦人会古平分会の主催で、出征軍人遺家族慰安演芸会が古平劇場で開かれる

▲先の規則により、鮮魚・魚介類の統制が実施される

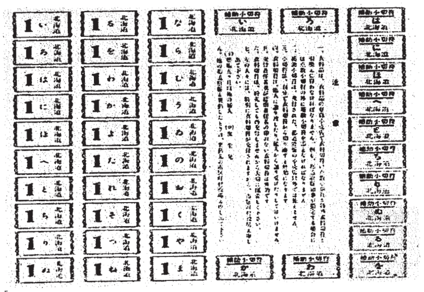
▲余市・古平・美国間定期航路が、今までの１日１便から午前・午後の１日２便となる

▲稲倉石国民学校に高等科が設置される

▲北海水力電気（株）など４社が統合して北海道配電（株）が設立される

▲農会が水田の温床苗代を共同で行うことを推奨し一部で実施される

▲俳誌『高潮』主幹鈴木壽月が来町し、町内の愛好者等と吟行し句作の指導をする



↑衣料品の切符（品目によって点数が定まっていて点数を切り取って使う）

→大日本国防婦人会・愛国婦人会のたすき（愛国婦人会のたすきは洗ったら色が落ちて字がうすい）

水田温床苗代での苗取り風景　→

（写真は後年のもので参考として）